

SPELT

November 2012 Vol.1, No.2

实用英語教育学会

NEWSLETTER

目次

巻頭言

实用英語教育学会会長 柴田晶子

第1回研究会について

講演 1 「中学校は今」

原 努（札幌市藤野中学校 校長）

講演 2 「小学校外国語活動の課題とこれから—小学校英語教育学会千葉大会の報告」

久野寛之（北海道文教大学 教授）

講演 3 「高等学校におけるティベート活動」

木村純一郎（北海道国際情報高等学校 教諭）

フォーラム

参加者の声

第1回研究会に参加して

平澤健一（札幌市立平岡南小学校教諭）

特別寄稿

「高等学校におけるティベート活動」

木村純一郎（北海道国際情報高等学校教諭）

シリーズ「小学校からはじまる实用英語教育」

「第2回 数と数字とアルファベット」

久野寛之（北海道文教大学 教授）

お知らせ

巻頭言

ごあいさつ

実用英語教育学会会長 柴田晶子
札幌大谷大学社会学部 教授

実用英語教育学会からニュースレター第2号をお送りするに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

2011年2月に、小学校・中学校・高等学校・大学の校種を問わず、英語教育に携わる全ての教員にとって身近な研究組織を作りあげることを目指して設立されたこの学会ですが、その2年目の活動もいよいよ終盤を迎えております。この間、昨年度は設立間もない4月に記念すべき第1号の紀要を発行し、2月には、中・高・大の教員の方々にお集まり頂き第1回研究大会を開催することができました。学会としての本格的な活動を開始して2年目を迎えた今年度は、9月に紀要第2号を

デジタル版で発行し、10月には第1回目となる研究会を開催し、年が明けた来年2月には第2回研究大会の開催が予定されております。校種を超えた本音の語り合いの中から、言葉だけに終わらせない実質的な「連携」を模索して行こうという趣旨に賛同して会員になって下さる方が徐々に増えてきたことは、この上なく嬉しいことです。今後ますます会員数を増やし、活動の輪が広がっていくことを願ってやみません。

さて、今回のニュースレターでは、10月13日に開催された第1回研究会の内容を中心にお届けします。

第1回研究会について

講演1：中学校は今

札幌市藤野中学校 校長 原 努 先生

概要： 数学がご専門の中学校長としてのお立場から、小中及び中高の連携についての原先生のご経験や観察をお話しいただきました。藤野中学での実践例や、現在札幌圏で進行中の様々な取り組みについて、また、その中で見えてきた成果や課題等を中心としたお話を伺いながら、学校文化の異なる各校種の壁を乗り越えて連携を強めていくために必要なことは何か、英語活動や英語教育の担い手である教員と、学校の管理運営責任者と

しての校長は、それぞれどのような役割を担って行くべきかなどについて考えさせられるお話をしていただきました。

プロフィール： 東京都大田区出身。北海道大学理学部数学科卒業。1981年より札幌市内の中学校に勤務。2011年より現職。主な研究・実践テーマは「組織論」、「生涯発達心理学」、「数学教育における視覚情報・聴覚情報の活用のあり方について」。

講演2：小学校外国語活動の課題とこれから—小学校英語教育学会千葉大会の報告

北海道文教大学 外国語学部国際言語学科 教授 久野寛之 先生

概要： 2012年7月15日・16日、第12回小学校英語教育学会(JES)が千葉大学で開催されました。2日間でのべ914名が参加し、公演、シンポジウム、ワークショップをはじめ、80本の研究発表や実践報告が行われました。小学校外国語活動における評価のあり方、すぐれた実践例、新教材『Hi, Friends!』の活用法など、久野先生が目から見た大会のハイライトをご報告いただきました。

プロフィール： 滋賀県野洲市出身。北海道大学文学部英語英米文学専攻課程卒業。1989年から1998年まで米国ジョージア州サバナ市の公立小学校の《外国語マグネット》プログラムで9年間日本語教育に従事。1999年より現職。主な研究分野は、英語教育、英語音声教育。

講演3：高等学校におけるディベート活動

北海道国際情報高等学校 英語科 教諭 木村純一郎 先生

概要： 木村先生は、英語ディベート普及に携わり、北海道では先駆者的な役割を担っておられます。大会に出場する生徒たちの指導はもちろんのこと、高校教員の指導スキル向上をめざしたセミナーなども実施されています。高校生の多くが大学に進学する現状を踏まえ、高大をつなげる英語の表現能力育成の視点からご提言いただきました。

プロフィール： 東洋大学文学部英米文学科卒業。芦別総合技術高校、カナダ アルバータ州 William Aberhart High School、登別高校、札幌丘珠高校を経て、2002年度より札幌国際情報高校に勤務。高校英語ディベート連盟 (HEnDA) 北海道地区理事。

フォーラム

「自由に語り合おう！——参加者全員で描くこれからの英語教育のビジョン」

様々な校種や立場で、様々な年齢層の学習者を対象にした英語教育に携わる参会者の皆さんから、日頃の実践やそれを通して感じておられることなどをお話いただきました。自律した学習者を育てるという視点から、「教えすぎないこと」の大切さについて考えさせられ、「教え込む」だけでは必ずしも英語力が身につくわけではないこと、「学ぶ意欲を育てる」ことが重要であることを再確認しました。

話し合いの中でも、当日最後の講演をしていただいた札幌国際情報高校の木村先生の英語によるディベートを取り入れた実践への関心は高く、実際のディベート大会参加に至るまでの流れや指導方法などについて多くの質問が出されました。先

生からユーモアあふれる、また興味深い示唆に富んだお答えをお聞きすることができました。そこで、木村先生には「実用英語教育とディベート活動」と題して、これまでの実践を踏まえた先生のお考えなどを改めて原稿にいただきました。全道高校英語スピーチコンテストの準備でお忙しい中、お引き受け下さった木村先生には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

また、当日参加された平岡南小学校の平澤先生からは、今回の研究会の感想と併せて今後の実践研究の必要性をご提言いただきました。原文のまま掲載させていただきます。皆様からもご要望やご提言をお待ちしております。

参加者の声

実用英語教育学会 第1回研究会に参加して

札幌市立平岡南小学校 教諭 平澤 健一 先生

本日は、素晴らしい講演をお聴きすることができて、とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

実用英語教育学会へ小学校の現場から、要望というか、希望というか、こうあればよいという提案をいくつか書きます。ひょっとしたら失礼な物言いになってしまっているかもしれないと心配ですが、できるだけ歯に衣着せない書き方をしたいと思います。また、これはあくまでも私個人の感想であって、小学校の教員の皆さんを代表しているわけではありませんので、ご了解ください。

1. 私は、小学校での実践を通して授業研究を行っていきたいです。教育理論や“難しいこと”は大学の研究者の方にお任せして、現場でどのように授業を行うか、具体的な実践研究が大切だと考えている先生方は、小学校には多いと思います。私は、大学の

研究者の先生方にすぐれた理論研究がなければ、日頃の実践はありえないと考えておりますが、やはり、実践がメインの軸になることが大切だと思います。

2. 小学校の現場には、英語とは縁もゆかりもない先生が多すぎます。実は、私も大学までは英語の興味があるとは言えない人間でした。教員になってもそれは続き、英語が小学校に入ってくると知るまでは、TVで海外ドラマを見る程度でした。そんな私が、突然、「英語の授業をしろ」と言われてから、わずか4～5年……。あまりにも経験年数が足りません。新卒のときは、ひどい授業を指摘してくださる先輩がいましたが、当然今の外国語活動にはありません。その意味で、実践研究ができる場が大切だと思います。

以上です。今日は本当にありがとうございました。

実用英語教育とディベート活動

札幌国際情報高等学校 教諭 木村 純一郎 先生

世界で初めての「工学部」がどの大学に作られたか、皆さんはご存じでしょうか？ 意外なことに、その答えは我が国の「東京大学」なのです。

「大学」はヨーロッパで生まれ、長く「真理の探究」即ち「哲学」の場所として発展しました。「工学」のようないわゆる「実学」が学問として認知されたのは、ごく最近のことなのです。しかしながら、今や、どれだけ数の大学が純粋に「哲学の場」として存在しているのでしょうか？ 私はこの混乱が深く教育の現場に影を落としていると考えています。

今を遡ること 30 年前、私が高校生だった頃、日本人の多くは「英語を使うこと」を求められませんでした。例え求められることがあったとしても、それは大学入試で「英語を理解する」ことを求められるだけであったように思います。しかし今では社会のグローバル化が進み、日常的に英語を使うことを求められる人の数が多くなりました。今では、あらゆる場所の公的表示が日本語と英語で併記されたものになっています。事実上、英語は日本の公用語になりつつあるといっても良いでしょう。

一方で、「学校」における「英語教育」は大きく変化したのでしょうか？「実学」としての「英語教育」は定着しているのでしょうか？私にはそうは思えません。日常、目や耳にする英語教育の多くが、「使うこと」を前提に為されているようには思えないのです。それを判断する最大の根拠として、教室の中で英語が「使われていない」ことが挙げられます。

「英語を使う」とは、一体どういうことでしょうか？ シンプルに考えれば、それは「英語を使ってコミュニケーションする」、別な言い方をすれば「英語を使って対話する」ということに他なりません。しかしながら、未だに教室内で学生、生徒、児童同士が対話するのを見ることは多くありません。一見そのように見える活動はありますが、実

際には極度にコントロールされた予定調和のものになっていることが少なくありません。多くの英語教員が、こうした現状からどうやって脱却すべきか頭を悩ませているものと考えます。

「体育」の授業には、複数で行うスポーツやゲームが取り入れられています。これらは、「運動能力を高める」とことを目的とする「運動させる」ための「仕掛け」として機能しています。同じように、私たちの英語の授業の中で、「英語による対話」を現出させるために、このような「仕掛け」を取り入れることは出来ないのでしょうか？

「ディベート」は、その仕掛けとなり得る活動です。ディベートはひとりではできないので、必然的に「対話」を前提とします。つまり「コミュニケーション」が前提なのです。「コミュニケーション能力」を育てるという「実学」的な目標が国家によって設定された今、ディベートをどのように授業に取り入れるかを考えることは無益ではないと思います。

「ディベート」というと、なにやら小難しいものと感じる方も多いでしょう。しかしながら、ディベートを「対話」や「議論」を導くものと考えれば、それほど特別なものでもない気付かれることと思います。フルサイズのディベートを目指す必要はありません。日常の活動の中にディベートの要素を盛り込み、議論を促すことだけでも大いに意味があると思います。「紙辞書と電子辞書のどちらがよいか」について「考えさせる」「話させる」「書かせる」だけでも学生や生徒が学ぶものは少なくない筈です。中学生なら「箸とスプーンではどちらが良いか」を話させてみても良いでしょう。小学生なら「夏と冬、どちらが好きか？好きな理由と嫌いな理由を挙げよ」などというトピックで対話をさせてみると面白いかもしれません。

高校であれば、思い切って生徒を募り、ディベート大会に参加してみてもどうでしょうか？ 高文連国際交流専門部ではこれまでに4回、全道英語

ディベート大会を開催しています。今年は、全道から16校24チームが参加しました。もちろん大会に参加するチームの中には、力をつけているチームもあれば、そうでないチームもあります。しかしながら、どのチームも5試合の予選を戦ううちに確実に力をつけます。スポーツの大会と同じように参加するチームは勝つことだけを目標にする必要はありません。それぞれが力をつければそれで良いのです。ディベートが英語教育の中のひとつの「フォーム」と言われる所以です。

全道ディベート大会では、高校英語ディベート連盟 (HEnDA) の試合形式を採用しています。この形式では、英語でするディベートに合わせて、初めて挑戦する場合にも取り組みやすいように工夫がされています。いわゆる「反駁」は「アタック」と「ディフェンス」に分けられており、「立論」と「アタック」の後には、相手チームによる「質問」の時間が設定されています。

答えを見つけることを目的とするディスカッションと比較すると、予め答えが用意されているディベートは、はるかに取り組みやすい活動だと言えます。さらに試合では、「立論」の中で、議論すべき内容が Advantage/Disadvantage としてさらに絞り込まれます。「高校における制服廃止の是非」が論題だとすると、「毎日、清潔な服を着ることが可能になる」という Advantage や、「家庭の負担が増える」という Disadvantage が提示され、それに対して以後の議論が為されるのです。実は、ディベートのルールは極めてシンプルなので、複雑に考えないことが大切なのです。

普通の授業では、最初からフルサイズのディベートに取り組むのは難しいでしょう。時間をかけて、ディベート的な要素を授業内容に取り入れながら、少しずつ準備を進める必要があります。私は、自分で Mock Debate と名付けた活動を取り入れています。これは、指示されたトピックについて生徒二人一組のペアで、協力してスクリプトを作り、それぞれ賛成・反対の立場に分かれて議論する「演技」をするものです。二人で協力して議論の流れを考えることで、「対話による学び」が進みますし、何より事前に準備ができるので、心理的なプレッシャーがかかりません。実際には、教科書の Lesson で農薬の利用について勉強しているよう

な場合には、その最後に「農薬利用の是非」について2分程度の Mock Debate をさせます。私は、それぞれのペアに発表させると時間がかかるので、ひとつのクラスを6つ程度のグループに分け、同時進行で発表させ、最後に各グループに代表となるペアを選ばせ、そのペアにクラス全体に対して再度発表させています。私の経験では、生徒はこの活動を大変好みます。創造力を問われるところが面白いのか、熱心に取り組む生徒が多くいます。また、優れた内容の発表には拍手が巻き起こったりすることもあります。この活動は、トピックを工夫さえすれば、どのような英語力を持つ生徒にも有効だと思います。

これは一例であって、工夫によって様々な活動が可能です。また、このような形態のディベート活動を導入するだけでも十分な効果が得られると思います。要は、これらの活動が「英語を使ってコミュニケーションをする」ための「仕掛け」として機能すれば良いのです。

教える側にとっては、生徒をディベートに取り組ませることは、通常のレクチャー型の授業形式から離れることを意味します。ここに抵抗を覚える方は少なくないかも知れません。「教える」から「学ばせる」への態度の転換を強いられるのです。しかし、実はそれこそがディベートがもたらす最大の教育効果のひとつなのです。教員は teacher としてではなく、facilitator として生徒の学びに参加することになります。場合によっては、「教えない」努力が求められます。

「仕掛け」が機能し、生徒が自ら学ぶようになれば、自然と生徒が「学ぶ喜び」を感じることが多くなります。それが、生徒が Mock Debate のような活動に熱心に取り組む理由のひとつなのかも知れません。ディベートに取り組ませるときには、この「楽しさ」の演出が極めて大切です。教員の力の見せどころでしょう。

ディベートを経験したことがある先生の数はいくつか少ないでしょう。不安を感じる先生も少なくないと思います。しかし、「案ずるより産むが易し」です。是非一度「考えて対話する」活動を授業に取り入れてみてください。上手く「楽しさ」を演出することさえできれば、学生や生徒が一生懸命取り組む姿に驚かされる筈です。

久野寛之（北海道文教大学 教授）

第2回 「数と数字とアルファベット」

アラビア数字とローマ数字

♪おおきなのおおきの古時計、おじいさんの時計♪
の、あのクラシックな掛け時計とか、お父さんの、



ちょっとおしゃれな腕時計の文字盤にはローマ数字が並んでいます。そんなふう
に日常生活の中に存在しているものに注意を向けさせ、そこから何かを学ばせる
というのはとても大事なこと

だと思います。ですから、英語活動で数字を扱う時には、アラビア数字だけでなく、ローマ数字もぜひ取り上げたいものですね。それに、小3からローマ数字を習っているわけですから、5年生でローマ数字を勉強するのはとても自然な流れではないでしょうか。また、アラビア数字と違い、ローマ数字には表意文字的な要素（IVは $V-I=4$ 、VIは $V+I=6$ という具合）があり、ひとつの文字の中に足し算や引き算の概念まで入っています。学びのネタが満載です！

大きな数(その1)

また、「数」ほど実用的な概念はありませんね。日常生活では、時間を聞いたり、お店やレストランで代金のことを話したりするときなどなど、欠くことのできない概念です。かくも実用的な概念を小学校から英語で学ぶ理由はいろいろあるかと思いますが、小学校から大学まで、ゆっくり時間をかけて、何度も何度も練習してきてもらいたい理由を一つ挙げると言われたら、私は、迷わずに「**大きな数を簡単に数えられるようになるから。**」と答えます。これまで、経済学専攻の短大生に「時事英語」という科目を教えたり、看護学専攻の大学生に一般教養英語を教えたりしてきた体験と、私自身のアメリカでの生活体験から、実用面での利益という観点に絞って言うと、大きい数を簡単

前号に掲載の今後の連載予定

- 第1回： ○と×（1号に掲載）
- 第2回： 数と数字とアルファベット
- 第3回： “Excuse me.”と“I’m sorry.”
- 第4回： “Nice to meet you.”と“Good to see you.”
- 第5回： “Sir”と“Ma’am”

に数えられるようになることが断トツで重要です。大きな数を簡単に数えるというのには、二つの意味があります。それをこれからお話しします。

《4桁区切りできない子ちゃん撲滅作戦》

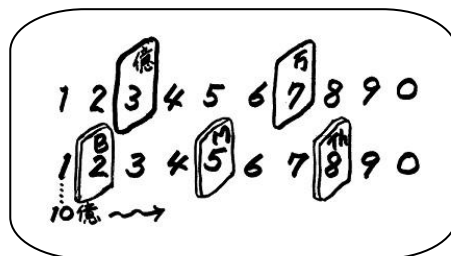
経済学を学ぶ短大生に「時事英語」を教えた頃、いつもバカの一つ覚えのように繰り返していたことがあります。ちょっと古い例ですが、次のような英文記事に出くわすと…

In a report, the Finance Ministry’s Policy Research Institute estimated that so-called “freeters” aged 35 or older will increase to 1,480,000 by 2021, about triple the current level. (2006年5月24日付 *The Mainichi Daily News*)

その中の大きめの数字（上の例では1,480,000）を見せて、「なぜこんなふうに数字にコンマをつけるか知っている人はいますか？」と聞くのです。ほとんどの学生はきょんととして、考えたこともないという表情をします。勿論、「数えやすくするためです。」と答える学生はいるのですが、「じゃあ、コンマをつけると、なぜ数えやすくなるのですか？」と聞くと、うまく答えられる学生はほとんどいません。でも、小学校の先生方は「あれ？」と思われるかもしれません。というのも、3桁毎にコンマをふっても、日本語ではあまり数え易く

はならないので、小学校では4桁毎にコンマを打つ万進法を教えていらっしやるとか。だとすると、小学校の先生方が、「どうして大学生がその質問に答えられないんだろう。おかしいなあ…。」といぶかしがられるのは当然です。実際、インターネット上には、「指導要領には4年生で『大きな数を表す際に、3桁ごとに区切りを用いる場合があることに触れるものとする』とありますが、小学校でのメインはやはり4桁区切りのようです。」などといった書込みも見られます¹。

4桁区切りの万進法と言われる読み方を、きっと私も小学校で教わっていたのかもしれません。でも、私の頭には入っていませんでした。そのため、算数音痴の私は、こういう大きな数字を数える時、いつも数字のお尻から、一、十、百、千、万…一億…千億、一兆…と1桁ずつ左に数えていました。ところが、英語ではコンマに合わせて3桁毎に新しい単位が増えて行くということを習ったとき、この問題が一挙に解決されたのです。右端から順に、コンマの1つ目は“thousand”（千）、2つ目は“million”（百万）、3つ目は“billion”（十億）、4つ目は“trillion”（兆）のように読み、これらの単位の間3つの数字を順に、…hundred, …ty, 最後の数字と読んでいけば、いとも簡単に読めてしまいます。例えば、上の例文に出てくる1,480,000なら、2つ目のコンマは“million”で、その前に1があるので“one million”，それから、次の、1つ目のコンマとの間には480があるので、“four hundred eighty”と言ってから1つ目のコンマの“thousand”をくっつければできあがりというふうです。つまり、1から100までと、4つの単語を覚えるだけで9兆9,999億9,999万9,999まで英語で言えてしまえる。しかも、同じ数字を日本語で言おうと思ったら、一番左端にあるコンマを「千」、「百万」、「十億」、「兆」のどれかと置き換えるだけで、残りは日本語なので、自動的に読めてしまう。Wow!!! 目からウロコとなったわ



けです。自分が感動したので、小学校で4桁取りを教えているということを知らなかった私は、「どうだ。すごいだろう？」と、経済学科の英語授業で毎年得意気に話していたのです。

現実問題として、日本社会では明治以来3桁区切りでコンマをつけることが慣習化され、すっかり定着しています。そのため、手許に鉛筆がない時に大きな数字を日本語で早読みしようと思うと、目の前の大きな数字に、自分で、心のコンマを4桁毎にふっていくしかありません。でも、そういう頭の体操は、私のような「算数苦手」っ子ちゃんたちには所詮無理な話で、結果的に、お尻から読むことになります。そんな可哀そうな子どもたちがこの世にあふれているのではないかと思います。そこで、小学校英語活動の時間から、《4桁区切りできない子ちゃん撲滅作戦》を開始するというのはどうでしょうか。英語活動による算数ヘッドスタート計画が成功すれば、親御さんからの拍手喝采間違い無しです。

大きな数(その2)

9,999,999,999,999 も確かに大きな数ですが、100や401も別の意味で感覚的に《大きな》数です。

「数字」を表す単語に“numeral”と“number”という英語があります。前者は文字としての数字。後者は数としての数字。病室、アパートやマンションの各戸を表す104号室の「104」の1と0と4は、順番を表す名前としての数字(numeral)です。名前ですから足し算、引き算はできません。テスト問題の「問1」と「問4」を足しても、「問5」にはならないのと同じ理屈ですね。それに対して、 $104 + 96 = 200$ と言うときの104の1と0と4は名前ではなく、価値を持った値としての数字(number)です。だから、1は100が1個分という価値、0は10がゼロ個分という価値、4は1が4個分という価値を持っているので、この価値、値を加減乗除することができます。

価値を持つ数としての数字401は、100が4つ、10がゼロ、1が1つの数字なので、たかが3桁の数字でも、“four hundred (and) one”と読まなければならない、長ったらしく感じます。でも、401

¹ <http://www.jial.co.jp/wordpress/?p=69>

を名前としての文字列と見るなら、4が1つ、ゼロが1つ、1が1つ並んでいるだけなので、ただ、“four-‘O’-one” [フォー・オウ・ワン] と言えればいいだけです。これは簡単で良い！ネイティブはもちろんそう感じるので、値のある数字を言う時も、文字としての数字のような言い方をすることがあります。

ホテルの部屋や自分の住んでいるマンション (apartment/condo²) のことを話したり、誰かが入院している病室のことを話すときに、401号室 “Room 401” (Rm. 401) [ルーム フォー・オウ・ワン] などと言うこともあるでしょうから、大きな数字を小さい数字で言う言い方にも慣れさせておいてあげたいものです。特に “10#” や “100#” というような数字は、[ワン・オウ・～]・[テン・オウ・～]ではなく、[ワノウ～]・[テノウ]と発音することになるので、これを何度も繰り返し口から出して言うことは、先行子音と後続母音がかっつく現象(リエゾン)を小さい頃から何度も発音練習することになります。それも、この音連鎖に慣れさせてあげたい理由です。

他に《大きな数》と言えば、米国及びグアムやプエルトリコなど「米国に依存している地域」³ とされる地域と、旧英領ホンジュラスのベリーズ (Belize) で使われているカ氏(華氏)の温度ですね。iPhoneをお持ちの方の中には、温度の初期設定がカ氏になっているのに驚かれた方も少なくないはずです。さすが米国アップル社製の製品だと思いました。

さて、このカ氏ですが、看護学科の学生に体温に関連する英語表現を教える際、教科書に

看護師：“What is your normal temperature?”

(平熱は何度ですか)

患者：“Ninety-eight.”

(98度です)

のような会話が出てきた時点で、丸暗記しておくべき《大きな数》を教えます。

² アメリカ英語では、賃貸マンションはすべて “apartment” です。分譲マンションであることを強調したければ、“condominium” ということばがあります。日常会話では、短く詰めて、“condo” [コンドウ] と言います。

³ 米国大使館のホームページに記載の用語 (<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/jusaj-profile-50states.html>)

- ◆ 平熱(36.5°) : $36.5 \times 9/5 + 32 = 97.7 \approx 98^\circ$
- ◆ 家に帰る熱(38°) : $38 \times 9/5 + 32 = 100.4 \approx 100^\circ$
- ◆ 医者に行く熱(40°) : $40 \times 9/5 + 32 = 104^\circ$
- ◆ 沸点(100°) : $100 \times 9/5 + 32 = 212^\circ$
- ◆ 氷点・凝固点(0°) : $0 \times 9/5 + 32 = 32^\circ$

小学校では、3年生の理科で地表の温度を測る学習をしますが、セ氏やカ氏ということばは出てきません。高校の教科書には出てくるようですが、中高の指導要領の中には出てきません。でも、カ氏は、iPhoneにもTOEICにも出てきます。幼稚園から高校まで国際交流のためのパートナー探しのためのネットワークサイト epals.com などアメリカのパートナークラスを見つけ、「そっちの気温はどう？寒い？」(送信) ⇒ 「ああ、寒いよ！ついに32度。家のプールに薄氷が張ってる。」(返信) のようなやりとりを教室で提示できれば、英語特区でなくても、異文化に対する驚きと、加減乗除の計算に対する新たな意欲をかきたてるような授業ができるのではないのでしょうか。



大きな数(その3)一時間をかけてやる理由

さて、いままで二つの《大きな数》について書いてきましたが、私が本当に「小学校から大学まで、ゆっくり時間をかけて、何度も何度も練習してきてもらいたい」と思うのは、やはり、最初の方の、実際に大きくて長い数字の方です。

10年以上も前の研究⁴ ですが、Camos他(2001)によると、英語を5年間勉強したフランス人が英語で数字を数えるのにかかる時間を測ると、母語のフランス語で数字を数える場合の約1.4~1.6倍の時間がかかったそうです。この実験で使われたのは1から30までの小さい数でしたが、それが億を超える大きな数になったら、その差はさらに広がるでしょう。日本人でかなり英語ができる人でも、大きい数の計算をする時は日本語で数え

⁴ Camos, V., Barrouillet, P. & Fayol, M. (2001). “Does the Coordination of Verbal and Motor Information Explain the Development of Counting in Children?” *Journal of Experimental Child Psychology*, 78, pp. 240-262.

るということをよく耳にしますが、これで納得できますね。契約文書や新聞記事の中の大きな数字をゆっくり日本語で理解する時間がある時はいいでしょうが、そんな悠長なことが許されない場合には、はじめから英語そのもので大きな数字を読み慣れておくことが決定的に重要になります。



前回（第1回）の連載で、私が28歳からの11年半をアメリカで日本語教師として過ごしたことをご紹介しましたが、その11年半のうちの9年間を小学校教員として過ごしたジョージア州 Savannah（サバナあるいはサバンナ）市で通訳のアルバイトをした時のことを思い出します。当時は、バブル後とは言え、アメリカに支社を持つ日本の銀行がまだ健在感を維持していた頃です。あるとき、Gulfstream という、中型ジェット機の販売では世界的シェアを誇る地元の会社にニューヨークの某日系銀行から銀行マンが来るので通訳をしてほしいと知人から依頼がありました。内容は、南米の某国の政府が政府専用機として自社のジェット機を購入したがつているのだが、融資が必要なため、その国に提示する融資計画についてその銀行と話し合うことになっているというも

のでした。そんな会議に同席する機会は滅多にあるものじゃないと、興味本位で引き受けたのですが、大きな間違いでした。当日は、ニューヨーク支店からやって来たその銀行マンの意向で、彼がわからない時だけ私が通訳するというので会議が始まりました。ところが、会議が始まるや否や専門用語や大きな数字が飛び交い、私の頭は全くと言っていいほど会話について行けません。結局、「わからない時」は、その商談後の工場見学と食事の時だけで終わったのですが、そのおかげで、私は何とか大恥をかかずにすみました。あのときほど、大きい数字に慣れておくことの大切さを痛感したことはありません。もし数字が、日常生活でも、特殊な商談場面でも、きわめて重要な意味を持つ概念であるなら、やはり、どんなに大きな数字でも大丈夫のように、子どもたちに、たっぷり時間をかけて訓練をしておいてあげたいと思います。なぜなら、さきほどふれた Camos 他(2001)の研究によると、数を数える能力は、訓練次第でいかようにでも伸ばせるらしいからです。

アルファベット

数字のことで紙面を取りすぎ、アルファベットのお話しをする余裕がなくなっていました。そんなわけで、アルファベットについては、また次回にお話しをしたいと思います。

それでは、次回まで、ご機嫌よう！

お知らせ

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。

このたび第2号が発行されましたので、詳しくは実用英語教育学会ホームページ(<http://spelt.main.jp/>)の右側の研究紀要の各号をクリックしてご覧ください。

紀要原稿の締切は8月末日（予定）ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

◆研究大会について

2013年2月16日（土）に研究大会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。研究大会で討議したいテーマやご意見をみなさまから募集しておりますので、1月中旬をめどにお気軽に事務局までお寄せください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。



編集後記

時間がたつのは早いもので、第1回研究会を終えてからアツという間に一月以上が経過してしまいました。ようやく Newsletter No. 2 を皆様のもとにお届けできてホッとしています。現在は2/16の研究大会に向けて準備中で、プログラムのうち基調講演と研究発表のひとつの内容が決まりました。また、第1回大会に引き続き、今回も参加者全員で自由な意見交換ができるフォーラムを開催します。なるべく早い時期に、プログラムの全容をお知らせするように努めますので、皆様のご参加を心からお待ちしています。

実用英語教育学会

編集： *SPELT Newsletter* 編集委員（柴田晶子・石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行： 2012年11月30日

事務局： 〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

e-mail: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。